

広島市安佐地区におけるバレーボール運動の発展 とその教育的影響に関する総合的研究 (3)

——市民調査／大会参加者調査／バレーボーラー
調査の分析を中心に——

荒井 貞光*・佐々木 宏**・岸本幸次郎***・宇 野 豪***

(受付 1998年9月21日)

1. はじめに——目的と方法

「バレーボール冬の時代」¹⁾とするショッキングな見出しのもとに、日本バレーボール協会の現状が新聞紙上に報道されたのが1997年であった。1996年のアトランタ五輪では男子は出場権を逃し、女子は史上最低の9位に終わった。ナショナルチームの不振に象徴されるようにVリーグの大幅な観客減、スポンサーの撤退が相次いでいたという。加えて1998年にはVリーグの人気女子チーム、ダイエーが親企業不振により解散に至り、バレーボールの不振はこゝに窮まれりという印象を多くのバレーボールファン、バレーボーラーが抱いた。

3年間にわたる本研究は、このようなバレーボール自体の競技力と熱気がこれまでになく底レベルに喘いでいる時期と丁度重なって行われた。東京五輪の女子チーム金メダルからミュンヘン五輪の男子チーム金メダルをピークとする日本の栄光は今や取り戻す術は皆無なのか、ひょっとして永遠に日本のバレーボールは世界のトップレベルの座を奪い返せないのではないか。同時に東京五輪以降、ママさんバレーの名前で親しまれてきた地域スポーツ、生涯スポーツとしてのバレー熱も下降の一途を辿るばかりであり、また少年少女バレーの国内大会に出場するチーム、などの総数も減

* 広島市立大学教授 ** 広島修道大学教授 *** 元広島修道大学教授

1) 中国新聞, 1997年6月26日, 朝刊スポーツ欄

少しているのではないかと等々の不安もつき重なり、いわば国技でもあったバレーボールの現状と前途は悲観的な材料ばかりが出そろったここ数年であった。

とりわけ広島は、本研究(1)ないし(2)の中で詳細に記述分析されているように「バレーボール王国」としての歴史、伝統が関係者のみならず国内外のスポーツファンが広く知る土地柄でもある。混沌とする時代の範は歴史に求めるという訓えに沿ったわけでもないが、本研究をスタートさせる目的は以上述べてきたバレーボールが置かれている現状と決して無関係ではないことを先ず申し述べたい。

本研究(3)は、(1)と(2)の歴史的研究と並行して行われた。

地域住民のバレーボールとの関わりを、地域や年代差、性差など社会的属性によりその特長を明らかにし、それらをベースにしてスポーツと平和観や伝統意識との関連を数量的に見たのが1年目に行われた研究(以下〈調査1〉という)である。2年目の研究は(以下〈調査2〉という)、ユニークなルールと大会運営で知られるバレーボール大会の参加者を対象にして行われた。安佐地区の伝統的なスポーツ大会である大会が現在にどのように引き継がれ評価されているかを見ようとしたものである。3年目の研究は(以下〈調査3〉という)、広島県内のバレーボーラーで実際に何らかの組織に所属しチームも協会、連盟等に登録している人達に、現在の日本のバレーボールの評価、課題、再建のアイディア等を率直に聞いたものである。大多数のバレーボーラーによる日本のバレーボールの改革プログラムの基礎データと多少オーバーではあると言えるかもしれない。

以上のことからわかるように、本研究(3)は、地域住民やバレーボール選手の意識や行動、考え方を質問紙により回答してもらうというアンケートを主としたものである。伝統や歴史の認知度、あるいは平和観はアンケートという表面的なものではその実相を認識できないという見解もあるかもしれないし、その種の先行研究は残念ながら殆んどない。従って比較ができず歴史や伝統をアンケートにより明らかにするという方法自体が不適切

だと言われるかもしれない。しかし、本研究(1)と(2)の歴史的記述の内容を(3)において表層的ではあるが量的にその傾向や平均、多少、特長を概括することで、(1)(2)(3)を通して、安佐地区のバレーボール運動を総合的に分析記述するという所期の目的を遂行することにしたい。そういう意味で不備不足な点があることは拭えないがある種のパイロット的研究として理解してもらえれば幸甚である。

アンケートの対象と実施方法、回収率等について以下に記す。

〈調査1〉——1995年

1. 内容 安佐地区のバレーボールの伝統、歴史についての認知度一般、自分のバレーボールのキャリア等。
2. 対象 安佐南区の児童・生徒約1000名に配りほぼ100%に近い回収を得る。

小学校——古市小、祇園小、大町小、安小、緑井小、川内小（約400名の5年生）

中学校——祇園東中、安佐南中、安佐中、安西中（約300名の2年生）

高校——沼田高、安古市高、祇園北高、安西高（約300名の2年生）

一般住民——郵送法によるアンケートを選挙人台帳により等間隔抽出をし行なう。約1000名。

いずれの場合も1995年2月～3月に行なう。

〈調査2〉——1996年

1. 内容 広島市学区対抗バレーボール大会の参加チーム約100チーム、1000人に対して行なう。大会の歴史の認知度、大会やルールの評価、大会の好嫌度等。回収率はチームでは約9割、人数になると約8割。
2. 1996年8月上旬、郵送でチーム代表者に送り、回収を大会当日9月上旬に行なう。

〈調査3〉——1997年

1. 内容 日本のバレーボールについての評価、また自分の所属するチームの評価を行なう。クラブやチームの望ましいあり方、スポーツの

望ましいやり方等一般的スポーツ活動についても質問する。

2. 広島県内の各種連盟、組織の登録チームに郵送する。約1020チーム、約14000名

小学校 195チームに送り約 5 割の回収

中学校 149チームに送り約 5 割の回収

高 校 220チームに送り全チームより回収

実業団 52チームに送り全チームより回収

一 般 204チームに送り全チームより回収

家庭婦人 199チームに送り約 5 割の回収

配布数が各々のチーム事情により特定できず、また回収数もその関係から正しい数値を出すに至らなかった。しかし、大量の回答票を得ることができており、全体の傾向は今回の分析によりつかみえるのではないかと考える。

3. 1997年10月～11月に実施し、再請求を10月中旬に行い、高い回収を得た。

2. 「バレーボール王国」としての歴史の認知度、

その継承について

本研究(1)(2)において、広島、とりわけ旧安佐地区が広島バレーボールの発祥の地であり、当時の嚶鳴小学校（現在は古市小学校）のグラウンドを中心にして多くのバレーボール選手が輩出し、またバレーボールが地域と学校と家庭を結ぶ重要な結節軸となってきたことが説明された。本節では、バレーボール王国という呼び方に象徴されるその歴史について、守りを基本とする広島バレーボールの頂点にたつ猫田選手について、また地域のスポーツクラブの先駆けともいえる嚶鳴クラブ等について、現在の一般市民、バレーボーラー、地元の小、中、高校生はどのくらい知っているのかを明らかにしようとするものである。歴史や伝統が、1960年代以降の急激な社会変化のなかで“風化”していると言われるが、まずどの程度、当時の名

前や人物が認知されているかを探りたい。

表1～2は、〈調査1〉で得られた結果である。小、中、高校生の場合、「よく知っている」「少しは知っている」を合わせると、小学生で32.6%、中学生で25.7%、高校生が46.7%と過半数にならないのに対し、学生・成人は74.6%の割合で「バレーボール王国」としての広島のバレーボールを認知している。小、中学生が少ないという結果であるが、これからの学校生活、社会生活の中で歴史を知るのかもしれないし、既に世代をつないでバレーボールの歴史は伝わらないのではないかという二つの解釈が可能である。一般的には、バレーボールのクラブやチームの活動の中で、その歴史を知るというのが自然である。その考えからするとバレーボールへの関わり方の違いで認知度に差があるかないかも一つの判断基準になるかもしれない。後で検討する。

表1 「バレーボール王国」の認知度 (%)

	よく知っている	少し知っている	あまり知らない	まったく知らない	非該当
小学生	15.7	16.9	26.2	41.0	0.2
中学生	10.1	15.6	26.0	47.2	1.1
高校生	19.3	27.4	20.9	32.1	0.3
大学生・成人	52.1	22.5	15.8	9.3	0.3

表2は、「嚶鳴クラブ」「猫田選手」「古市のバレー」についての認知度をまとめて結果を示している。「猫田選手」「古市のバレー」の結果は、表1の「バレーボール王国」の認知度と同じように、小、中、高校生は大半は過半数にならず（「猫田選手」については、高校生の場合57.1%の割合が知っていると答えているのが例外である）、一方、大学生・成人は7～9割

表 2 クラブや人物等の認知度 (%)

	嚶鳴クラブについて					猫田選手について					古市のバレーについて				
	よく 知っている	少しは 知っている	あまり 知らない	まったく 知らない	非 該当	よく 知っている	少しは 知っている	あまり 知らない	まったく 知らない	非 該当	よく 知っている	少しは 知っている	あまり 知らない	まったく 知らない	そ 他
小学生	6.1	7.3	12.8	73.8	0	27.3	16.9	8.4	47.4	0	20.3	17.4	17.7	43.9	0.7
中学生	1.4	4.2	10.8	82.3	1.3	16.0	13.2	9.4	60.4	1.0	14.2	14.9	11.1	58.3	1.5
高校生	3.8	3.5	12.5	79.9	0.3	35.9	21.2	6.0	37.0	0	25.5	20.1	10.9	43.2	0.3
大学生・ 成人	15.1	18.0	17.0	48.9	1.0	77.5	13.5	2.6	6.1	0.3	53.1	18.6	9.6	19.0	0

の認知度がある。「嚶鳴クラブ」については、小学生、中学生、高校生の場合どれも認知度が10%にならず、しかも大学生・成人の場合も33.1%と他に比べ著しく低い結果となった。

〈調査1〉の対象者は、安佐南区内の小学校、中学校、高校に通う児童・生徒と安佐南区内に居住する20才以上の成人男女である。広島バレーボールの発祥の地である安佐南区のバレーボールの伝統や歴史が、現在の安佐南区民にどう受けつがれ認知されているかがある程度明らかになった。表1の内容は、広島のバレーボールの歴史・伝統に対するいわばアウトラインであり、表2の「嚶鳴クラブ」「猫田選手」「古市のバレー」が具体的な内容ともいえる。「猫田選手」はスポーツ漫画等でもとり上げられるほど児童・生徒も触れる機会があったのかもしれない。「古市のバレー」の歴史も数字を見る限りでは児童・生徒の場合でも3～4割が知っている。しかし、「嚶鳴クラブ」については知らない人がほとんどになってきており、その低率が「バレーボール王国」の認知度にも間接的に影響しているのかもしれない。生涯スポーツ社会の中で地域スポーツクラブの必要が言われる現在、半世紀前に既にユニークな地域クラブが活躍したことは、例えば「嚶鳴カップ」などを設けるとか工夫をし受けついでいく必要があるのではなかろうか。

表3は、歴史を伝えていく場合、何を手がかりにしたらよいかに答えるものである。特に、児童・生徒の場合の認知度が低いので分析対象から学

表3 バレーボールの好きのタイプと「バレー王国」の認知度
($P<0.05$)

	よく 知っている	少しは 知っている	あまり 知らない	まったく 知らない
やるのも見るのも好き	23.7	23.7	22.0	30.7
やるのは好き, 見るのは好きではない	16.1	15.1	30.1	38.7
やるのは好きではない, 見るのは好き	7.1	22.4	28.9	41.5
やるのも見るのも好きではない	5.2	10.4	17.8	66.7

* 小, 中, 高校生のみを対象としたクロス集計

生・成人を外し, 児童・生徒の日頃のバレーボールへの関り方と認知度の関係を見ようとしたものである。

結果は明らかである。バレーボールへの関り方と歴史の認知度の間には一定の関係がある。つまり, 「やるのも見るのも好き」「やるのは好き, 見るのは好きではない」「やるのは好きではない, 見るのは好き」「やるのも見るのも好きではない」という順に認知度が高く, 統計上からも明らかな差がある。確かに「やるのも見るのも好き」というバレーボールへ最もポジティブに関わるタイプでも「あまり知らない」「まったく知らない」が52.7%と高い。歴史の認知度を上げるのにこれだけが効果が上がる策とは言えないが, バレーボールへ「やるのも見るのも好き」というタイプを増やすことが歴史の認知度を上げていくことにつながる事は確かである。

表4は学生・成人として一つのグループで扱ってきた数値を10才間隔の年代別にクロス集計し, 年代差を出そうとしたものである。特に認知度が低い「嚶鳴クラブ」についての結果を再集計している。

この場合も結果がよくわかる。60代以上の安佐南区の市民の「嚶鳴クラブ」についての認知度が高い。50代と60代を区分するものは, 終戦をはさむ時間区分である。要は戦後生まれは, 嚶鳴クラブが活躍する昭和20年代前半は幼児期であり直接触れ, また記憶にないということだろう。伝統を

表 4 年代差からみた「嘸鳴クラブ」の認知度 (%)

	よく 知 っ て い る	少 し は 知 っ て い る	あ ま り 知 ら な い	ま っ た く 知 ら な い	そ の 他
20代	0	8.9	20.0	68.9	2.2
30代	5.0	16.7	6.7	71.7	0
40代	11.0	17.1	22.0	48.8	1.2
50代	10.7	22.6	17.9	42.9	0
60代～	48.7	23.1	20.5	5.1	2.6

継承するという課題を解決する場合、この50代以下と60代以上の市民、バレーボーラー、あるいはバレーボールの指導者の世代ギャップをどう埋めるかが一つの手がかりになる。

表5は、〈調査2〉より「バレーボール王国」として広島が昔から有名であったことを「よく知っている」という答えのみを出身地域との関連からみている。現在バレーボールの協会や連盟に加入しプレイしている人の結

表 5 「バレーボール王国」の出身地域別認知度 (%)

1	2	3	4	5	6	7	8	9
安 佐 南 区	安 佐 北 区	西 区	中 区	南 区	東 区	県内備 北地区	佐伯区	安芸区
63.5	58.0	56.3	55.7	53.8	47.6	43.8	42.9	40.0

10	11	12	13	14	15
中 国	県内備 後地区	関 東	九 州	東北・ 北海道	関 西
39.2	37.4	35.5	25.6	25.0	22.2

* 「よく知っている」の答えだけをとり出し順位づけした

果を安佐南区・安佐北区など細かく小学校から中学校を過ぎた地域と比べ、地域と伝統との関連をみたものである。

旧安佐郡を中心とした「安佐南区」63.5%、「安佐北区」58.0%が1, 2位を占め、以下広島市内の各区が入り、その後に広島市を外した県内、「中国・四国」や「関東」「九州」「東北・北海道」「関西」という結果となっている。

出身地を小学校高学年から中学校時代と限定した。この時期はスポーツに深く関わりあいを持ち、その後のスポーツ生活を決定する期間になると想定したからである。この結果は、小、中、高校生のバレーボールを除いた実業団や婦人バレーの選手達であり、平均以上にバレーボールへの時間と情熱をかけた人達といえる。それだけにその時期の出身地がどのようなスポーツや文化（音楽や絵画とか）の歴史や伝統をもつかが重要である。地域に個有のなにかが小学生や中学生の一生のレジャースタイルを決定すると言えるかもしれない。

表5の結果は、間接的ではあるが地域の歴史・伝統というものと人々のライフスタイルの関係の強さを示していると思われる。

表6は、地域のスポーツの歴史を4つのタイプに区分し、それとオリンピックや全日本レベルで活躍する選手がどのくらい出ているかをクロス集計している。但し、地域のスポーツの盛衰の度合は、バレーボールが盛んか否かを聞いた結果であるが、一流選手の輩出の度合についてはバレーボールの種目の限定をすることが調査技術的にできなかった。

表6 地域のスポーツ熱と一流選手の輩出度 (%) ($P<0.05$)

	い る	いない	わからない
今も昔もさかん	26.9	23.3	49.8
今はさかん、昔はそうでない	22.7	29.3	48.0
昔はさかん、今はそうでない	15.4	32.8	51.8
今も昔もさかんでない	11.2	34.7	54.0

「いる」と「いない」の答えにしぼってみると、地域のスポーツ熱が「今も昔もさかんである」が「いる」が26.9%、「いない」の23.3%、逆のタイプの「今も昔もさかんではない」が「いる」11.2%、「いない」34.7%と対照的な傾向を示している。統計的にも5%レベルの危険率で結果は有意な差があるといえ、地域のスポーツ熱と選手の輩出力との間にはかなりの関係があると見てよいだろう。但し、「今はさかんだが、昔はそうでなかった」と「昔はさかんだが今はそうではない」のタイプを比べると、現在のスポーツ熱の度合の方が、選手の輩出力に強く影響することがわかる。この点からも歴史や伝統を継続、発展することの大切さがよくわかるのではない。

本節のまとめとしてスポーツと平和の問題をとり上げたい。広島はスポーツ王国としての顔を持つと共に、平和都市としての顔をもつ都市である。スポーツによる平和創造は、スポーツの歴史、伝統とはどう関係してくるのだろう。

表7は、バレーボール王国としての広島を知る度合いとスポーツによる平和実現の可能性についてクロス集計し、有意差を求めたものである。

「よく知っている」と答えた人の57.8%が「賛成だし、実現できる」と答えるのに比べ、「まったく知らない」人の場合、「賛成だし、実現できる」と答える割合は23.5%に低下している。この分析は〈調査1〉の対象者であ

表7 「バレーボール王国」の認知度と「スポーツによる平和」の可能性の関係 (%) ($P < 0.05$)

	賛成だし、 実現できる	賛成だが、 実現できない	賛成できない	わからない
よく知っている	57.8	32.7	7.9	1.6
少しは知っている	35.7	47.1	11.8	5.5
あまり知らない	28.3	44.7	22.2	4.8
まったく知らない	23.5	34.1	20.0	22.4

り、その層が小学生から60代の市民まで幅広い。この結果をみる限りでは、バレーボール王国の歴史をよく知る人々ほどスポーツによる平和の実現に対して肯定的であることがわかる。スポーツにより平和が達成されるのか、平和が達成できてスポーツが可能なのかという論議が必要だが、おそらくその議論の決着は難しくどちらの命題も必要であり、スポーツと平和の関係を双方向的に関わらせていくことが具体的と思われる²⁾。バレーボール王国の歴史をよく知る人ほどスポーツと平和の関係を肯定的に（その何割かは楽天的に）とらえる人が多いということをまずそのままに受けとめたい。広島のスポートイベントには「ピースカップ」という冠名詞がつくことが多いが、市民の多くの層がその実現を望んでいるという事実を関係者や選手は積極的に受けとめ、関係者、関係機関、選手、指導者が平和創造についてそれぞれの立場でできる取り組みを大会の持ち方などから工夫したいものである。

3. 具体的な広島バレーの伝承としての「広島市学区対抗バレーボール大会」について

スポーツの歴史はルールの変遷史と言ってよい。スポーツのルール学を提唱する中村は、「スポーツおよび運動文化（以下スポーツという）が、それぞれの時代や社会における文化的存在であることを、ルールを中心に位置づけて明らかにし、スポーツについての科学的認識を深めるとともに、併せて皮相な相互的文化受容の克服を企図するものである」³⁾と述べ、スポーツの文化社会学的研究の軸にルールを位置づけることの必要を示している。

本研究(1)(2)で詳細に分析記述されている安佐のバレーボールの普及、発展の歴史は、バレーボールのルールそれ自体の変遷史ではない。しかし、

2) 荒井貞光・谷口勇一・内海佳子「広島アジア競技大会レポート 21世紀の平和のための基礎研究」広島市立大学特定研究スポーツ班調査研究報告 P 52 1995

3) 中村俊雄「スポーツの風土・日英米比較スポーツ文化」大修館書店 1981 P 232

ルールの導入と地域に合う内容に改変するプロセス、またバレーボールの大会規定というルールの変遷の記述という点で、日本の特に広島という地方の独自性を背景にしたユニークなスポーツルール史のケーススタディーといえる。

本節では、安佐のバレーボール運動の普及と発展に貢献した「広島市学区対抗バレーボール大会」をとり上げ、その認知度と独自のルール、選手構成などについて大会に参加している人々がどのように認識しているかを明らかにし、そのことを通しこれからの大会のあり方についても若干の考察を試みたい。

表 8 は、性別からみた広島市学区対抗バレーボール大会参加者の回数別の結果である。〈調査 2〉は、大会の事前に調査票を配布し、当日回収するという方法をとった。男性、女性ともに出場回数は様々であることがわかる。

表 8 大会参加者の出場回数 (%)

	7 回以上	6 回目	5 回目	4 回目	3 回目	2 回目	初めて
男 性	17.5	5.2	8.2	14.9	17.0	19.6	17.5
女 性	16.7	6.7	8.9	9.1	12.2	20.3	25.4

表 9 は、過去の大会出場レベルである。男性参加者の方に「全国大会」「県大会」レベルが多く、女性参加者に比べてバレーボールのキャリアの高い人達が参加している。参加者は、安佐南、安佐北区の各小学校区の代表チームとして参加するので、特定の地区に偏らず分散している。〈調査 2〉

表 9 出場者のレベル (%)

	国際大会	全国大会	県大会	市大会	区大会	町大会	出たことはない
男 性		16.5	33.0	22.7	7.2	13.9	6.7
女 性		6.7	19.5	20.7	21.2	16.9	13.1

で得られた回答票が大会参加者を正しく代表している性格のものかどうかはこれだけでは言いにくい、大会に詳しい共同研究者の判断ではほぼ均等にサンプリングした結果になっているといえる。

この大会の性格を著しく特色づけているものに男性に対する禁止ルールがある。チームの男性は、アタックラインより前で攻撃してはならないし、サーブは全てアンダーサーブでなければならないという。表10は、その男性対象のルールに対する賛否を聞いた結果である。

表10 男子のオリジナルルールについて (%)

	現在のまゝでよい	どちらか一方のみの禁止にする	両方とも禁止にしない	わからない
男 性	82.0	7.3	4.1	6.7
女 性	84.0	3.4	1.0	11.2

男性、女性とも「現在のまゝでよい」とする割合が82.0%、84.0%と大半を占める。現在のこのオリジナルルールを参加者は好意的にうけとめていると言えよう。本研究(1)(2)によれば、「この大会も頼実力氏のアイディアだった。子供のバレーボールを盛んにするには母親の理解が大事と考えた」⁴⁾からという。スポーツを地域に啓蒙、普及していく時期は、一人のカリスマ的リーダーがルール等多くの事を決定し企画し実施していくことが多い。安佐地区のバレーボールも同じ事情があった。問題は、導入、展開の時期を終え何10回と大会が続くなかで初期の目的とルールが現状にマッチしなくなったときの判断である。その時の判断のベースは、一人の指導者のキャリアと知識ではなく大会参加者全員の意識と価値が尊重されるべきである。

くり返しになるが、男性選手対象のオリジナルルールの肯定率は男性、女

4) 佐々木宏・岸本幸次郎・宇野豪・荒井貞光 「安佐地区バレーボール運動の成立と展開—広島市安佐地区におけるバレーボール運動の発展とその教育的影響に関する総合的研究—」 1998 P 37

性ともに高い。

表11は、安佐地区のバレーボール運動を象徴していると思われる、いわゆる「ダンサン・ジョロク」——男性 3 人女性 6 人で編成する 9 人制のバレーボールの大会ルール——についての賛否である。男性、女性ともに「現在のまゝでよい」とする肯定的回答が 7 割前後と多いが、表10でみた男子のオリジナルルールについてと比べるとやや低い結果となった。女性は「男女単独のチーム編成にすべき」が多く、男性は「男女の比率を変える」がやや多い。7 割から 8 割は現行のルールに賛成するが、2～3 割は反対ないし消極的な傾向にある。

表11 チームの男女構成について (%)

	現在のまゝで よい	男女単独のチー ム構成にすべき	男女の比率 を変える	わからない
男 性	74.2	10.3	7.7	7.2
女 性	68.5	16.2	4.8	10.0

表12の内容は、大会全体についての総括的反応を聞いている。好き嫌いという主観的な答えだが、大会の創設時の主役といえる女性参加者は28.0%しか「好き」と答えていないことに注目せざるを得ない。「嫌い」が14.1%で男性よりも2倍多く、「どちらともいえない」とする回答保留者は56.7%に上る。大会全体についての好嫌度を更に深く検討する。

表13は、大会を好きとする参加者と嫌いとする参加者はどこでその違いがでるか、また一つ一つの違いの重みはどうかを多変量解析の統計技術の

表12 大会の好嫌度 (%)

	好 き	嫌 い	どちらとも いえない
男 性	54.4	7.8	37.8
女 性	28.0	14.1	56.7

表13 好きと嫌いの判別分析

1	2	3
チームの男女構成 (0.68127)	大会の参加目的 (0.56782)	大会までの練習回数 (0.33230)

(判別率 77.2%)

- * 大会を好きとするグループ、嫌いとするグループの2つを従属変数とする
- ** ステップワイズ方式
- *** 説明変数として、「大会の参加目的」など7つを上げる
- **** SPSS 6.1 のソフトを使用

一つである判別分析という方法を用いて分析している。好き嫌いに関連する項目としては、「大会の参加目的」「大会の歴史」「男子のオリジナルルール」「チームの男女構成」「参加の出場回数」「去年の成績」「大会までの練習日数」の7つを上げた。ステップワイズ方式とは、統計的に有意な差があると思われるレベルまでの項目のみを最終的にリストアップする方法である。

7つの項目は、全体として77.2%の判別率を上げており、好きと嫌いをよく判別する項目群といえる。最も好きと嫌いに影響する項目は、「チームの男女構成」で標準化判別係数 0.68127 となった。2番目に影響するものは「大会の参加目的」0.56782、3番目が「大会までの練習日数」0.33230 となった。具体的な回答傾向に沿って解釈しなおすと次のようになる。

大会を好きと答える参加者ほどチームの今の男女構成比率、いわゆるダンサン、ジョロクに肯定的であり、否定的な参加者ほど嫌いと答え、この伝統的なオリジナルルールが好き嫌いを決定している。「大会の参加目的」の場合、「バレーボールが好きだから」と答える参加者は大会を好きと答え、逆に嫌いな参加者は「依頼されて仕方なく」が多い。当たり前の事情とはいえ、この項目が2番目に影響することに注目したい。大会の運営者や世話役の意識と参加者の意識の間のズレはこういうところに現われるのかもしれない。3番目の「大会までの練習日数」にも注目したい。大会を好きとする参加者ほど日数は多く、嫌いとする参加者ほど少ない。こ

れも当たり前のことかもしれないが、特に現在のライフスタイルの中では〈練習〉と〈試合〉の関係は微妙である。〈試合〉を意識し〈練習〉をしすぎると若い世代、女性ほど嫌う傾向にあると思われる。男性のメンバーは出場回数も多いのでつい練習に夢中になり新人の女性メンバーを指導する時間と日数が多くなることが予想される。またこの3つの項目は見方を変えると「チームの男女構成」「大会の参加目的」「大会までの練習日数」にしても大会そのもののムードや勝ち負けではないことに気づく。なにかこの辺りにもこれからの課題が見い出せるのではないか。「広島市学区対抗バレーボール大会」は、これからも継続していくことは参加者、関係者は納得していよう。また、参加者の中に少しずつ大会の性格や大会の楽しみ方において差が出はじめているのも了解していよう。スポーツの近代化、全国化の歴史は、ローカルルールが中央のルールに統一、一本化していく歴史である。それは全国的普及のためには不可欠の方法ではあるが、ローカルルールのもつ地域性や大衆性がともすると喪われやすい。「ダンサン・ジョロク」とは男女混合——ミックスであり「ミックスの思想とは、補い合いの妙味からくる個体を越した合体のダイナミズムの追求」⁵⁾であって、わが国のスポーツ文化のみならず、男性と女性の問題をジェンダーの視点からとらえる場合、極めて示唆的なケーススタディーの可能性を持っている。研究者の視点からこれからも注視し続けていきたいと思う。

4. 現役のバレーボーラーの問題と課題

本節では、現役のバレーボーラーが日々活動するなかで何に困り、また低迷が続くといわれるバレーボールの現状についてどのように判断しまたどういう想いでいるのか、少子化や価値の多様化が進行するなかでチームやクラブの維持に困難を来たす場合が多いが、どういうチームやクラブを

5) 荒井貞光「スポーツニーズとセンスの変容」岡本包治編著「地域における生涯スポーツの振興」所収ぎょうせい 1992 P 155

望むのかを探ることにする。分析は、広島県内の各種のバレーボールの連盟や組織に登録しているチームや選手を対象に実施した〈調査3〉を主にする。従って、直接、安佐地区のバレーボール運動と結びつきはないとも言えるが、バレーボール全体の動向と問題を明らかにすることで、安佐地区のバレーボール、さらには広島のバレーボールのこれからの方向性が見えるのではないかという期待の下に、以下の分析と記述を行ないたい。

表14は、バレーボールを始めた時期や場、きっかけになった人、バレーボールとの関わり方について聞いた結果を年代別に比べている。

「バレーボールを始めた時期」の結果を見ると、年代が上につれて時期が分散することがわかる。但し、小学生、中学生の場合は、バレーボール組織に加入している者が対象になっているので、当然その時期の開始の比率は高いし、年代が上につれて選択肢が増えるという現実的な事情もある。そういうことを考慮しても、年代が上になるほど、バレーボールの開始時期は「中学校」と「社会に出て」の2つの時期を中心に多様化している。

「バレーボールとの関わり方」の結果を合わせて考える。年代が上るほど「バレーボールだけ」の比率は低くなる。逆に「バレーボールが主、他の種目も」「バレーボールは途中から」が増える。この場合も年代が上るほどいろいろな経験する機会が増えるわけで当然の結果とも言えるだろうが、年代が上のバレーボーラーほどいろいろな種目を経験し、下の世代の選手ほどバレーボールに限られているという結果は注目する必要があるのではないか。「始めた場」の結果を見ると、下の年代ほど多い場が「スポーツ少年団」で、逆に上の年代ほど多い場が「地域のクラブ」である。「学校の部活」は小学生の場合を別にすると、どの年代も50%前後を占めていることがわかる。それぞれの年代のスポーツ環境が違うので比較はしにくい項目である。

「きっかけになった人、場」の結果は、先に見た3つの項目に比べて年代の傾向はそれほど明らかには見られない。差は少ないが、「体育の先生」は

表14 年代別チームからみた

	バレーボールを始めた時期					始 め た 場						
	小学校	中学校	高校	大学	社会に出	体育の授業	学校の部活	少年団	地域のクラブ	民間のクラブ	職場のクラブ	遊びの中
小学生	92.7					1.1	15.8	54.1	18.2	0.7		8.1
中学生	55.1	42.9				2.9	43.9	33.9	12.0	1.5		4.6
高校生	45.5	34.5	19.7			3.2	56.5	29.4	5.3	0.9		0.1
20 代	49.4	31.2	6.8	1.1	11.4	1.8	50.4	29.1	7.3	2.0	5.5	3.7
30 代	24.0	45.7	6.8	0.4	22.9	5.0	61.9	4.5	17.2	2.7	2.2	6.2
40 代	9.7	51.6	4.7	0.5	32.9	4.6	58.6	1.4	27.7	2.3	1.7	3.5
50 代	9.4	42.5	3.1	2.5	41.3	3.8	47.5	0.6	33.8	1.9	3.1	6.9

* 始めた時期の空欄は復答のために外す

** 60代以上の回答者もあるが、人数が少ないため外す

年代が上の層に、「親」「兄弟」は年代が下、「試合を見て」も下の年代にや、多いと言える。

戦前から戦後にかけて、安佐地区のあちこちの校庭や空地からラリーやスパイクが決まる度に上ったであろう歓声や拍手と表14で見てきた現在のバレーボールをとりまく熱気とは周りをとりまく環境があまりにも違いすぎて比べようがないと言うしかない。一握りの選手を多くの町民が応援するという時代から、人々はその気になればバレーボールはもちろんその他種々のスポーツをやり易い時代になってきたからである。しかし一方で、児童、生徒のスポーツ環境を見ると、バレーボールを選ぶとバレーボールの他の種目を選べない、親や兄弟といった身内や少年団やクラブの顧問がスポーツチャンスをつくるといった言うなれば専門化、選択肢限定の状況が広まっている。複雑な時代になっていると言わざるをえない。

表15は、現在スポーツを続ける上で主に何に悩んだり困ったりしているかを、8つの選択肢の中から選んでもらった。チームが登録している組織別に結果を示している。どのレベルのチームも「能力について」「健康につ

バレーボールのキャリア (%)

きっかけになった人、場								バレーボールとの関わり方				
体育の先生	クラブ顧問	先輩や仲間	親	兄弟	近所の友人	テレビ	試合を見て	バレーボールだけ	他の種目も	バレーボールが主	は途中からバレーボール	いろいろな種目
3.1	23.1	20.2	15.2	11.6	19.1	1.1	2.9	54.9	14.3	18.9	7.0	
2.9	18.8	34.4	8.5	6.8	19.5	3.7	3.4	52.2	17.1	19.5	10.5	
4.6	18.8	37.2	9.7	8.4	13.5	2.5	3.2	49.8	15.0	21.3	12.9	
8.8	24.1	30.7	12.2	6.3	12.2	2.3	1.8	44.8	23.9	16.9	14.0	
12.2	23.5	26.2	4.5	3.1	20.0	7.8	0.9	39.9	24.8	22.2	11.3	
13.2	24.4	27.1	0.8	2.4	26.9	2.2	1.2	34.8	28.5	26.3	8.8	
18.8	22.5	25.0	1.3	1.9	25.0	0.6	0.6	30.6	33.1	28.1	5.0	

表15 バレーボーラーの悩み (%)

グループ	1	2	3	4	5	6	7	8
小学生	能力について 54.1	健康について 50.1	時間の使い方 44.0	人間関係 36.4	将来 23.5	周りの理解 19.8	費用 6.2	施設利用 5.5
中学生	能力 72.7	時間の使い方 44.0	健康 48.6	人間関係 48.2	将来 23.6	周りの理解 19.2	費用 18.3	施設利用 6.8
高校生	能力 69.4	時間の使い方 60.5	人間関係 46.1	健康 45.5	費用 23.5	周りの理解 19.1	将来 18.9	施設利用 6.0
一般	能力 59.7	健康 55.8	時間の使い方 44.1	人間関係 39.1	周りの理解 25.1	施設利用 17.3	将来 16.7	費用 14.5
実業団	能力 57.3	健康 53.4	時間の使い方 52.5	人間関係 37.0	施設利用 25.3	周りの理解 23.3	費用 19.4	将来 19.4
家庭婦人	能力 70.9	健康 66.0	時間の使い方 41.5	人間関係 40.2	周りの理解 30.1	将来 12.7	施設利用 5.6	費用 3.4

* 1. 2. 3.番目の悩みを合計して数値を出す

いて」「時間の使い方」「人間関係」が多い。これらはいつの時代の選手たちも悩み困ってきたことと言えるだろう。中学生チームのメンバーの場合、他に比べて特に多い結果となっている。悩むなかで自分を見つめ行動と思考の幅を広げ解決止揚するサイクルが、スポーツ教育の本質であった。しかし、悩みごと——ストレスの中に二重三重に解決不能のまゝに置かれる状態が長く続くと、選手やプレーヤーは萎縮し、ついにはドロップアウトしてしまう。特に、悩みごとの性質が自己自身に関わり自省的なものになるほど苦しさは重く長くなる。

「費用」「周りの理解」「施設の利用」「将来」等の悩みは、先の4つに比べるとはるかに低い割合になっている。これらはこれまでスポーツを続けていく上で大きな阻害要因となってきた。どちらかという他者との関わり方や制度への批判、解決を他者に、また未来へ持ち越せるものが多かった。一人ひとりの内面や価値観に関わるものが上位に来ている表15の結果を考えると、指導者、関係者が選手達の中に入りにくい関係のなかでスポーツが行われている時代ということかもしれない。

バレーボールの場合、悩みや不満はチームスポーツの性格上、チームやクラブのあり方に関係してこざるを得ない。現在のバレーボーラーは、運動部やクラブについてどのようなイメージを持ち望ましいあり方を求めているのだろうか。

表16は、チームのタイプ別に結果をまとめている。4位以下は数値が分散し低いこともあってそれぞれの上位3つを示した。

小学生、一般、実業団のチームメンバーが1位に「スポーツ以外の楽しみ」を上げる。特に、一般で実業団のチームは、1位と2位の数値の差が著しく、現実にはバレーボール主体の生活が送られ過ぎているということだろうか。中学生と高校生で1位に上るのは、「上級生、下級生が一緒」である。上級生と下級生がポジションをめぐる険悪な仲になり対立するという現実があるのか、ポジション獲得という勢力対抗関係とは関わりなく異なる学年ということからくる反目か、あるいは上級生、下級生という役割構

表16 これからの運動部・クラブのあり方 (%)

	1 位	2 位	3 位
小学生 (455)	スポーツ以外の楽しみ (38.9)	上級生, 下級生が一緒 (38.4)	男子, 女子が一緒 (18.7)
中学生 (410)	上級生, 下級生が一緒 (48.1)	スポーツ以外の楽しみ (37.4)	男子, 女子が一緒 (27.6)
高校生 (681)	上級生, 下級生が一緒 (51.0)	スポーツ以外の楽しみ (41.4)	男子, 女子が一緒 (19.1)
一般 (813)	スポーツ以外の楽しみ (42.4)	地域の指導者が教えら れる (29.7)	地域の大きなクラブで やる (25.7)
実業団 (181)	スポーツ以外の楽しみ (51.4)	地域の指導者が教えら れる (38.3)	上級生, 下級生が一緒 (29.2)
家庭婦人 (1407)	地域の指導者が教えら れる (35.6)	地域の大きなクラブで やる (28.9)	上級生, 下級生が一緒 (22.6)

* 次の8つの答えの中から2つ選び、それを合計したパーセント

** それぞれのチームカテゴリーごとにベスト3をリストアップした。

1. 地域のなかの大きなクラブで活動する。
2. 地域の指導者が指導できるものにする。
3. 生徒や大人と一緒にやれるようにする。
4. 上級生も下級生も一緒にやれるものにする。
5. 近くの学校の部員と一緒にやれるものにする。
6. 1軍, 2軍というチームが両立するものにする。
7. スポーツ以外の楽しみや活動のあるものにする。
8. 男子と女子と一緒にやれるものにする。

造自体が機能失調し存続しない手応えのなさをもたらす憧憬だろうか。小学生, 中学生, 高校生は「男子, 女子が一緒」をそれぞれ3位に上げている。この場合も現実がうまくいっておらず, そのことの裏返しの願望であろうか。

一般, 実業団, 家庭婦人の場合は, 共通して, 地域のクラブ, 地域の指導者という答えが上位に並ぶ。一般, 実業団, 家庭婦人のクラブは, 現実に地域のスポーツ施設を使って活動しているのではないかと思われるのにこの結果をどう理解すればよいのか。一般, 実業団の場合は, 職域という

ゾーンに束縛されている不自由さへの反発であろうか。家庭婦人の場合の地域願望は、いわゆるママさんバレーというイメージ、同タイプのメンバーの活動持続から生ずる倦怠感やマンネリから生ずるのだろうか。

いずれの場合も低かったイメージは、「1 軍, 2 軍というチームが両立するものにする」「近くの学校の部員と一緒にやれるものにする」「生徒や大人と一緒にやれるようにする」といった現実の集団を越えた集団間の構造や制度間の調整につながるものであった。そういう意味からすると、選手やプレーヤーは手固く自分たちの操作次第で変革可能と思われるものを選んでいいのかも知れない。しかし、学校や職場、家庭をとりまく、あるいは構成する条件は、内部での問題解決にあたることには不利な状況にある。先述したように少子化、高齢化の人口学的要因は、これまでの内部操作的なチームづくりやクラブづくりでは到底解決不能な根本的課題——人がいないを常態化しつつある。

次のようには考えられないか。学校、職場、家庭という従来の社会的結節軸に替わり、スポーツや文化というレジャー空間、集団がこれからの結節軸になるのではないか。人々はスポーツや文化という軸を中心にして離合集散をしていく。しかし、今はまだ過渡的であって、従来の結節軸を修復しないことには、それに替わる新軸がまだ受け皿としての機能を果せないのである。

表15にせよ表16にせよ困難な状況下にあるとはいえ、バレーボールに集中できる環境の中にいる人達であり、平均からすれば恵まれている人達ということになる。クラブやチームに入り活動するという段階に至る前の大多数の人達の問題はまた別であることを忘れてはならないだろう。

これまでデータを見て来た中で、“中学生”というステージの特異性、意味性について触れてきた。スポーツをする上で、中学時期という難しさを表わす結果を示しておく。

表17の数値は〈調査1〉の小、中学生である。クラス単位でアンケートをしているので一般的な小、中学生のデータといえる。よくわかるように、

表17 小学生と中学生のスポーツをする場 (%)

	体育の授業	学校の部活	スポーツ少年団	地域のクラブ	民間のクラブ	1人	スポーツ教室	しない	非該当
小学生	48.5	9.3	14.5	5.8	0.6	8.1	10.8	0.6	1.8
中学生	34.0	56.6	0.3	1.7	0.7	2.8	1.4	2.1	0.3

「スポーツ少年団」「地域のクラブ」「1人」「スポーツ教室」と小学生時期はスポーツチャンスの選択肢は広がっていたが、中学生になると、それらは「学校の部活」にほぼ一本化されてしまうということがわかる。上級学年ほど多様化の傾向が強まるべきであるのに、多様化の芽は中学になるとまったく摘まれてしまうのである。このショックは小学生から中学生へのスポーツ継続にとり甚だしい阻害要因となっているのではないか。この問題は、当然バレーボールの場合も同じであろう。〈調査1〉のデータは、安佐南区内の小、中学生の数値である。他地域でのデータがないので比較ができない。小学校ではスポーツチャンスは複数あるのに対し、中学では部活などで一本化されてしまうことが、安佐南区に特有の傾向であるとする、安佐地区のバレーボール運動が作り出した一つのマイナス機能——活動の拠点が学校を中心とする——ではなかろうか。学校のスポーツ施設を地域のクラブやチームが活用する方法が今、全国的に大きな課題になっている。多様化したスポーツチャンスを一人ひとりが各自のニーズとレベルに応じて選べるしくみづくりをどう構築していくか。ドッジボールをバレーボールに切り変える判断、新しい大会、ルールを地域に根付かせていくエネルギー、といった安佐地区のバレーボール運動の伝統を、現在のスポーツ振興の直面する課題——しくみづくりに活かしてほしいものである。

最後になるが、広島のパレーボールということを外して、日本のバレーボールの現状について広島県内のバレーボーラーに聞き、率直な回答を寄せてもらっている。一つは「バレーボールの競技人口が減少した」という意見に対する肯定度、二つは「バレーボールの観戦者が減少している」という意見に対する肯定度、三つ目が「日本のバレーボールは弱くなった」

という意見に対する肯定度である。紙幅の関係もあり、こゝでは日本のバレーボールの競技力について同じバレーボーラーがどのように判断しているかの結果をとり上げる。さらに先に上げた三つの意見に対し具体的にどのようにしたらよいかのアイデアや考えを自由記述の形で回答してもらっているの、それを類型化し、一つの方向を示してみたい。

年代差がよく出た結果となった。年代が高いほど「そう思う」として日本のバレーボールの競技レベルのダウンを認めている。人間の適応力はかなりあるものとする、低い競技力しか知らない世代はそのレベルからスタートすることになり高いレベルからスタートする選手に比べ、同じエネルギーを使っても結果に差が出てしまう。バレーボールの全盛時を知っている世代と知らない世代、広島のバレーボールの伝統を知っている世代と知らない世代のずれは相当にあるとすれば、そのずれを埋めるにはかなりの時間と労力が必要とされるようになるだろう。(なお、競技人口の減少、観戦者の減少についてもほぼ同じ結果を示している)

最後に自由記述について触れておく。

表18 バレーボールの競技力について (%)

	そう思う	思わない
小学生	52.5	48.5
中学生	68.6	31.4
高校生	80.4	19.6
20 代	86.5	13.5
30 代	87.1	12.9
40 代	89.7	10.3
50 代	92.3	7.7

* 質問文「男子女子とも、日本のバレーボールは弱くなった」と言われます。あなたは、どう思いますか。

** 「強くそう思う」「そう思う」を「そう思う」に。「そう思わない」「全く思わない」を「思わない」にまとめている

今回のアンケートの中で、「競技人口を増やすにはどうしたらよいか」, 「観戦者を増やすにはどうしたらよいか」, 「バレーボールを強くするにはどうしたらよいか」, これらの3つについての「自由記述」に寄せられた約800件の意見を集計し、分析した。

「競技人口を増やすにはどうしたらよいか」, この問に対する回答は、「底辺の拡大をする」(49%), 「バレーボールの楽しさを教える」(29%), 「全日本が活躍する」(18%), 「ルールの固定と柔軟化」(4%), という4つに概ね分かれる。その中でも、「底辺の拡大をする」という提言が最も多く、ほぼ2人に1人がそのように答えている。「底辺の拡大をする」ことの具体的な方法に関しては、「身近に指導者やまたバレーボールのできる場所を設けること」, 「誘いあう, 声を掛け合う」という声が多かった。次に提言の多かったのは「バレーボールの楽しさを教える」(29%)であり、「全日本・Vリーグの試合, バレーボールを題材にしたアニメ・ドラマ」を放映するというTVなどのメディアを通すという方法が上げられた。

「観戦者を増やすにはどうしたらよいか」, これに関しては、「試合内容の充実」(36%), 「バレーボールの魅力を知ってもらう」(34%), 「試合内容以外のサービス」(30%), という3つに大別できる。この3つは、数値をみればわかるようにほぼ均等に分かれている。提言内容を見ると、「試合内容の充実」については、「全日本がオリンピックの時など注目されている時に活躍する, またVリーグを活性化すること」, 「バレーボールの魅力を知ってもらう」ことに関しては、「バレーボールの試合をこれまで以上に放映すること」, 「試合内容以外のサービス」に対しては、「観戦料金を安くすること」が、観戦者の立場からそれぞれ求められている。

「バレーボールを強くするにはどうしたらよいか」, この質問に関しては、「練習をする」(57%), 「選手選考・強化方法の改善」(26%), 「指導者のレベルアップ・外国人指導者の採用」(15%), 「外国人の是非」(2%), という4つに分類された。最も意見の多かった「練習をする」ということについての具体的な提言は、「練習量を増やす」, 「メンタルを強化する」, 「日本

人の特性を活かした戦術の工夫をする」, 「体格・体力の強化をする」など様々なものが上げられた。このことは、日本と世界との間には「心・技・体」いずれを取っても差があるということを多くのバレーボーラーが意識しているということである。

自由記述の中で、「競技人口を増やすには」という中で「底辺の拡大をする」という意見が寄せられ、方法として「誘いあう、声をかけ合うこと」ということを上げた人は多かった。一方で「観戦者を増やすには」に対しては、「バレーボールの魅力を知ってもらう」という意見の中で、「呼びかける、声をかけること」は、少数の答えであった。底辺の拡大との数値の差と比べると約 $1/6$ である。「底辺を拡大する」ことに関しては、アンケートに回答していただいた方が問題解決に積極的に取り組もうとする姿勢が見られるが、だが、現在の状況を改善していくには、観戦者と選手が一体となり、問題に関わっていくことが必要ではないだろうか。

5. お わ り に

ラジカルな米国の社会学者 C. W. ミルズは「歴史の効用」について次のように言っている。「われわれは『過去からの継続』としてある事象を『説明する』よりは、『なぜそれが継続してきたのか』を問わなければならない。』⁶⁾ と。

本研究(3)のテーマに即していえば「なぜ」の前の段階の問い、すなわちミルズの表現に対比して言うと、それが果して「今も継続しているのか」を先ず明らかにすることと言えるかもしれない。

それとは言うまでもなく、安佐地区のバレーボールの伝統である。もちろんバレーボール活動や大会は途絶えずに行われている。しかし、安佐地区のバレーボール運動の精神や歴史も含めて引き継がれているかという問いに答えは簡単に出しにくい。安佐地区以上に活発にバレーボールが行わ

6) C. W. ミルズ「社会学的想像力」 鈴木広訳 紀伊国屋書店 1964 P 203

れているところは多いだろうし、そこでは伝統や精神といったものはさほどないままに活動は盛んに成立しているかもしれない。1950年代前後のミルズの時代は、社会的制度や集団、規範は厳然として前時代より引き継がれており、いわば“古きよき伝統や慣習”は永遠に続くものという見方が強く成されていた。それゆえに次の1960年代から始まる世界規模でのラジカリズムの提唱だったのかもしれないが…。

1990年代後半の今、文化、スポーツの普及と振興は行政の組織やプログラムも全国的に平均化、マニュアル化し、“いつでも、どこでも、だれでも”という生涯スポーツのトレンドにのり、地域の伝統や歴史と関わりなくその成果は上っているかのように見える。そういうスポーツの環境の中で、全国に先駆けてバレーボールを振興、普及させた安佐地区のバレーボール運動の伝統は現在の市民やバレーボーラーが認識しているのか。それらの解明を通して伝統や歴史がスポーツの普及、展開にどう寄与しているかが探れるのではないかと、本研究(3)に関わった研究者の視点はまずそこにあった。

表1～表18に示した分析結果は、3年間にわたり実施したアンケートの総体からすると一部に過ぎない。多量のデータ処理に追われミルズの言う「なぜ」の間には遥かに届かない考察に留まったであろう。しかし、それでも従来のスポーツの歴史社会学的な研究や民族学的研究では得られない歴史と現在を相関させる結果をいくつか引き出したのではないかと考えている。きわめて断定的、抽象的ではあるが、要約の意味をこめ命題の形式を用いてそれらをリストアップしておく。

- (1) 当然のことだが若い世代ほど安佐地区のバレーボールの歴史を知らない。特に40代と50代の間に認知度に関して大きなギャップがある
- (2) 「嚶鳴クラブ」など使用されない歴史的名称の認知度は極めて低く、逆に「猫田選手」など現在も時々とり上げられる名称は知られている
- (3) 現時点でバレーボールへの関与度が高いタイプほど歴史の認知度は高い傾向にある

- (4) 歴史の認知度の高低は、中学生時代までを過ごす地域により差がみられ、またスポーツ熱が高い地域ほど一流選手の輩出力が強い
- (5) 地域スポーツについて歴史の認知度が高い者ほどスポーツによる平和の実現について肯定的な意識をもつ
- (6) 地域の歴史を具体的に伝えるゲームのルールについては、大会参加者の 8 割は賛成するが、大会参加のルールになると賛成度は低くなる。さらに大会全体の評価は、女子の肯定度は著しく低い
- (7) 大会全体の好き嫌いは、その大会の独自性を形成する要因に関係しやすい

あくまでも今回得られた結果から抽象した関係式であり、半ば以上は仮説的であるかもしれない。このように単純化、図式化することは、ミルズの警告するところの人間理解の方法——「かれは社会的歴史的な構造との密接で複雑な相互作用のなかで理解されねばならない。社会的歴史的な行為者」⁷⁾——に相反するかもしれない。しかし、歴史ないし歴史学に効用がないという批判が妥当しているとする、歴史からの法則化への模索を拒絶し、従って現在にさらに未来への適用不可を自らが宣言してしまう禁欲的研究者精神にもあるのではないか。本研究(3)の歴史への基本的スタンスはそこにある。あえて歴史的事象にアンケートという数量的方法を採用するゆえんである。

(8)以下のリストは、表14～表18と自由記述の結果から作成した。安佐地区という地域要因から外れ、一般バレーボールの意識と行動について調べ、日本のバレーボール再建の契機をつかみたい。

(8) バレーボールを始めた時期や場、契機となる人物などのキャリアパターンと年代との間には何らかの関係がありそう。高年代ほどそれらは分散、多様化し、低年代ほど場や集団などが一元化する。しかし、年代により所与の環境、条件が異なるので厳密な比較にはなりにくい

7) C. W. ミルズ「社会学的創造力」 鈴木広訳 紀伊国屋書店 1964 P 207

- (9) バレーボールを続ける上での悩みで上位に上げられるものは、自己の能力や価値観、ライフスタイルなど自己に溯及するものが多く、費用、施設利用など条件的要求的なものは低い。他者関係的なものは中位に上げられる。
- (10) 望ましい集団のイメージは、現実には欠けている内容を補い願望するものが多い。バレーボールが優先する集団はバレーボール以外の楽しみを求め、学校の集団は異学年、異性との共存交流を望み、実業団や家庭婦人の集団はより開かれた地域性を求めている
- (11) スポーツを社会化（内面化）する上で重要な時期といわれる小学生から中学生への移行期をスポーツチャンスの場の図式からみると、小学生の時期は多様化しているが中学生になると学校の部活に収斂するのがわかる
- (12) 日本の場の競技力、観客動員力、競技人口の現状について、一般のバレーボーラーはマイナスの評価をしている。年代的にみると高年代ほどその傾向が強い。低年代の選手達は現在の低いレベルを普通に感じており、上昇バネが世界レベルに達しにくいかもしれない
- (13) 自由記述で寄せられた日本のバレーボールをレベルアップするための具体的なアイディアは総じてこれまでも度々とり上げられてきた内容が多い。当り前のことを実行することに尽きるかもしれないが、自由記述を大別しても矛盾をはらんでいる内容が多い。当り前 A と当り前 B を止揚するアイディアをこそ関係者や専門家が提出しなければならない。800件の自由記述を寄せる熱意に応えなければならないということである。

本報告を終るにあたり末尾で誠に失礼ではあるが、多くの方々に御礼の言葉を申し上げたい。まずは、安佐南区でアンケートに協力して下さった地域の方々と小、中、高校生、学区対抗バレーボール大会の参加者、そして県内の多くのバレーボーラーの皆さんである。おかげで多量のデータを

得、細かなクロス集計を行うことができた。またアンケートの実施に当りそれを仲介して下さった学校の先生方、バレーボールの関係者、指導者の方々にもお礼を申し上げます。広島市立大学の学生は、データの整理と転記など単純作業で時間を割いてくれた。特に大学院生の迫俊道君には自由記述の分析をしてもらい、助かった。

最後の最後になりますが、私にとっては珍しいこのような調査の機会（歴史とアンケートを結びつける方法）を与えて下さった広島修道大学の佐々木宏先生、岸本幸次郎先生、宇野豪先生には改めてお礼申し上げます。地理的には広島修道大学と広島市立大学は近いが、現実には共同研究を一つの大学内の研究予算で行うことはあまりない。所属する大学は異なるが、調査上のわがまを充分聞いてくれた総合研究所のスタッフの皆様にも心よりお礼を申し上げます次第です。（調査アンケートの集計結果等は保管してあるので、いつでも利用して頂きたい）

Summary

Research on the Volleyball Movement and its Educational Effects in Asa-minami District of Hiroshima City. (3)

——Analysis of investigation of citizens, participant
and volleyball player.——

Sadamitsu Arai (Professor of Hiroshima City University)

Hiroshi Sasaki (Professor of Hiroshima Shudo University)

Koujirou Kishimoto (Former Professor of Hiroshima Shudo University)

Tsuyoshi Uno (Former Professor of Hiroshima Shudo University)

This study aims at finding out the influence of history and tradition of sports by questionnaire. Volleyball has been popular in Asa district for a long time, we have spent three years to carry out this survey on inhabitants or players in this area.

The following is main results obtained after analysis.

- (1). Those who take part in volleyball have more historical recognition.
- (2). The best players are from the district where people are interested in sports.
- (3). Those who know the history of sports are more affirmative on the relationship between sports and peace.

We have many data and much knowledge that we have collected through this study for three years.

We appreciate cooperator of this research.